

(6) 学校事務部会

会 長 澤田 咲貴 (竹 島 小学校)
副会長 酒井 健太郎 (中村南小学校)
事務局 松本 望 (中村南小学校)

1. 研究主題「コミュニティ・スクールを通し、学校と地域をつなぐ事務職員を目指して」

2. 研究経過

実施年月日	研究のあらまし	会場	備考
令和4年 5月6日(金)	四万十市教育研究会 組織総会 内容：役員選出・研究主題決定・年間計画	中村南小学校	21名参加
令和4年 7月29日(金)	四万十市教育研究会 夏季研修会 内容：コミュニティ・スクールについての講話 講師：西部教育事務所 河野 通久 指導主事	中村小学校	20名参加

3. 今年度の取組

●四万十市教育研究会夏季研修会 講話

(1) コミュニティ・スクールについて

コミュニティ・スクール(CS)＝学校運営協議会を設置している学校

→保護者や地域住民が一定の権限と責任を持って学校運営に参加することで、校長が掲げる学校運営方針(育てたい子ども像、目指すべき教育のビジョン)を共有し、目標の実現に向けて協働する仕組みのある学校

→学校運営協議会の協議や熟議の時間を充実させることで子どもたちに関わる多くの方の様々な角度から課題や意見を取り上げることができる。

『熟議』・・・様々な立場の関係者が「熟慮」と「議論」によって新たなアイデアや考え方を見出し、問題の解決を目指す対話のこと。

(2) コミュニティ・スクールの必要性

○地域の課題・・・少子高齢化・人手不足・地域行事・伝統文化の継承・地域社会のつながりの希薄化・防犯防災 など

○学校の課題・・・学力向上・いじめ不登校・部活動・放課後の居場所・教育のICT化・キャリア教育・働き方改革・子どもの安心安全・生徒指導 など

これらの課題解決には、「社会総掛かり」での対応

＝『学校・家庭・地域による一体的な取組(連携・協働)』が必要

・地域住民が自ら地域を創っていくという「主体的な意識」への転換

・学校だけでは得られない知識・経験・能力を身に付けさせる(社会に開かれた教育課程)



これを実現可能にする仕組みの一つが『コミュニティ・スクール』

○コミュニティ・スクールのメリット

- ①組織的・継続的な体制が構築できる（教員の人事異動等に左右されない持続可能性）
- ②地域住民も教育の当事者になることで責任感を持ち、積極的に子どもの教育に携われるようになる
- ③地域住民と学校が“顔が見える”関係になり、保護者や地域の理解と協力を得た学校運営に繋がる

(3) 地域学校協働本部事業との一体的推進

◎CS（学校運営協議会）で学校運営に必要な支援に関する協議を行い、地域学校協働本部（地域）でボランティアの方々に支援活動を行ってもらう。（＝地域学校協働活動）

▼地域学校協働活動推進員（地域コーディネーター）

CSへ委員として参画し、地域学校協働本部へ人材・活動のコーディネーターとして参画することで、双方が持つ役割を十分に機能させ、相乗効果を発揮する役割を担う。学校運営の改善と地域づくりに資する活動の推進が期待される。

▼地域学校協働活動

地域住民、保護者、NPO、民間企業団体など幅広い地域住民等の参画を得て「学校を核とした地域づくり」を目指し、地域と学校が連携・協働して行う様々な活動（持続可能な取組にすることが重要）

○県内外の活動事例

読み聞かせ・クラブ活動・防災学習・伝統芸能（地域の祭りや踊り等）・人権学習・スポーツ体験（サーフィン教室等）・栽培学習（米・果物・野菜等）・英会話教室・愛校作業・見守り活動 など

○その他の工夫

- ・支援ボランティアの確保に向けチラシやリーフレットを作成。また、口コミが一番効果的であるため、チラシと一緒にボランティアの方々に取組を広めてもらう。
- ・コミュニティ・スクール推進員（CSマイスター）の派遣（全国に30数名程度）講演などを行い、課題等へのアドバイスをすることで取組の推進を図る。

◇参加者からの意見・感想

- *コミュニティ・スクールについて、制度のねらいは理解したが、自校の活動内容との差を感じているのでどう参画していくか、という視点で考えることができた。
- *山口県上宇部中学校の事例で「熟議」の大切さがわかりました。「熟議」も交えた会ができるようになると目的の共有も深まり学校と地域が育ちあうのだらうなと感じました。
- *現在、コミュニティ・スクールの立ち上げ準備を行っているので、今回の研修会を通じて得られた知識をもとに各種話し合いへ参加していきたいと思いました。
- *本校ではすでに導入されているので、制度についてより深く知ることができたとともに自校の課題も見えた気がしました。
- *大人ばかりが地域にお願いするのではなく、子どもたちが主体となって地域へ声をかけていくこ

とも大事だと思った。そして、そこから子どもたちへ地域のつながりの良さを学んでもらいたいと思いました。

＊CS マスターの講演依頼についてお話があったが、保護者の方や開かれた学校づくりで来てくださっている地域の方へ講演など見ていただけたら取り組みについて知ってもらえるのではないかと考えた。地域と学校の連携・協働に向けて、様々なアプローチが必要だと思った。

＊本校ではまだコミュニティ・スクールの立ち上げにはいっていませんが、コーディネーターの育成や取り巻くメンバー構成について、大人だけでなく子どもたちも参加した組織が、人を動かし課題解決への早道だと他校の実践からもよく分かりました。

＊コミュニティ・スクールと地域学校協働本部事業との関連・相違点など理解が曖昧だったところの理解を深めることができました。

＊他校の実践を映像で見ることで具体的な面が知れたのは分かりやすく良かったです。

＊地域にどれだけの手伝ってくれる人がいるのかを再度把握しなくてはと思いました。正直次年度から始まることの不安は大きいですが、自分のできることはがんばってみようと思います。

＊保護者や地域の方の協力があって成り立つものなので、事務職員が協働本部とCSが両方必要な理由を知っておいた方がいいと思いました。

4. 今年度の成果と課題

コミュニティ・スクールについて全員で同じ研修を受けることで共通理解に繋がり、各自が制度への理解を深められた研修となった。また、自校の取組状況などを情報共有することで、事務職員がどのように関わっていくべきか・求められていることは何かを考える機会となった。

令和5年度のコミュニティ・スクール導入に向け、地域と学校の双方にとってプラスとなるよう、それぞれの地域の特色を活かした協働活動へ一人ひとりがイメージしながら取組を進めていかなければならないと感じた。各自がキャリアに応じて出来る部分を見出し関わっていくことで、事務職員の学校経営参画の推進にも繋がっていく。

CSによって学校側がこれまでより更に地域などの外部へ協力を求め、連携していけば教員の負担軽減にも繋がり、管理職や事務職員だけでなく、教員も制度を理解することで、より一層その学校に合った形で活用していけるのではないかと感じた。

地域と深い繋がりを持った学校を構築していくことは、子どもの学びや体験活動を充実させ、自己肯定感の向上などこれからの時代を生き抜く力の育成に繋がる。今後もコミュニティ・スクールや地域学校協働本部について学習し、共同実施などの場で情報共有しながら学校事務職員としての職責を果たすとともに新たな役割を築き子どもたちの学びを支援していきたい。

